
久隅守景筆「四季耕作図屏風」についての一考察

久隅守景筆「四季耕作図屏風」（石川県立美術館蔵・重文。以下、本作と称す）は、水墨を基調として、実際の日本の農村を眺めたように絵画化した作品として高く評価されている。

室町時代の四季耕作図は、梁楷筆と伝わる「耕織図巻」の図様を規範として、その図様を写し用いることによって、中国の「耕織図」が備える政治的な象徴性を、足利将軍ひいては有力大名の権力表象として利用する目的を有していた。江戸時代以降、日本のモチーフの導入が増していき、ある種の和様化が進むが、多くの四季耕作図を遺す守景はそれを一気に押し進めた絵師として語られている。和様の四季耕作図の代表作として扱われる本作において、四季耕作図として強調されるべき農耕表現は画面の後景に配される。一方、前景には耕作とは直結しないモチーフが多く描き込まれており、守景の主眼はむしろそこにあると推察されてきた。

しかし、両者を合わせた本作の主題については、明らかにされているとは言い難い。本発表では、耕作を指し示さない、四季耕作図にとっては「外から来たもの」に注目して考察を行う。

右隻には年貢通知の書状を読み上げる代官が描かれる。画面が農村と農民によって構成されることで、観者による支配が実現することを前提に置く四季耕作図の在り方から逸脱しており、本作の主題に大きく関わる問題である。被支配領域の画面内に武士が登場することは、従来の四季耕作図における場、あるいは階級という境界が越えられていることを示している。

また、本作に見られる「和」と「漢」の混在は、従来語られるよりも複雑な様相を呈している。例えば、本作左隻の中央部には鷹狩の一行が表される。彼らも「外からやって来た」人々であるが、鷹狩はやまと絵にも描かれるモチーフであり、本作の図様には特定の絵巻を典拠として指摘し得る。これに対して、鷹が小鳥を襲う図様には、漢画画題である「鷲鳥図」が意識されている。

左隻の柳の下で納涼する男たちのポーズは、「夕顔棚納涼図」（東京国立博物館蔵）との関連が指摘されてきたが、彼らの形態の連関を含めて、隠逸の象徴的図様であると解釈出来る。本作に描かれた支配階級の中で、彼らは唯一身から刀を離して草履を脱いでおり、画面中に農村と山水的な理想郷の境界線を引く存在でもあると考えられる。

本発表では、このような四季耕作図の文脈を越えて描かれたものの意味を探ることにより、四季耕作図という画題そのものを問い直し、本作の主題の構造を明らかにしたい。その考察を通じて、本作の受容者についても可能性の提示を試みる。